

総 括

ナカガワ シゲミ
中川 成美

国文学研究資料館が開催する本国際日本文学研究集会も38回を重ね、世界の日本文学研究者、大学院生にも広く周知され、年々多彩な研究成果が多く寄せられているのは嬉しい限りである。集会を運営する委員会の委員長の立場から本年度の総括を行いたい。

日本文学が日本語を主とする言語芸術であるということは言うまでもないが、同時に文学という外郭を共有する芸術表現であることを忘れてはならない。その意味で日本文学は世界に開かれているのであり、研究もまた相互の交換・交流のなかであらたな発見を促していくこととなる。昨年度より本集会で導入されたシンポジウムは、そうした発見の場として機能していくであろうことが、本年度のシンポジウムからも十分に予測することができた。「図像の中の日本文学」というタイトルのもとに、委員の板坂則子氏を中心に企画されたパネルは、近年とみに活性化著しい日本文学における図像研究、例えば絵巻や絵入り本、屏風、浮世絵などの研究が、どのように文学研究のなかに定置されるかという大きな問題にアプローチしたものとして評価されよう。従来美術史などの分野を中心に研究・分析されてきたこれらのテキスト群に内包される「文学性」、あるいは現在とは違ったりテラシーで読み込まれてきたそれらを貫く「文学性」を探っていくためには、やはり文学研究としてどのように方法論を確立していくかということが重要だということが確認されるシンポジウムとなった。アンドリュー・ガーストル氏は春画にこめられた大衆文化における反体制的な意志

の所在について鮮やかに論じた。楊曉捷氏は中世絵巻における男女の交歓の場面から、読み取りという恣意的な行為そのものが実は伝統的な視覚表象の水準を構築してきたことを明らかにした。また土佐尚子氏はもっともあたらしい視覚芸術の分野として注目されるコンピューター・テクノロジーにおける芸術表現、例えばインスタレーションやデジタル・アート、あるいはプロジェクション・マッピングなどを対象として、その多様な可能性について作り手、研究者の両面から迫った。これらが文学研究の重要な対象として存立していることが十分に了解できるとともに、共有されるべきイシューであることが確認されたと思う。文学における視覚性は今後の可能性を含めてますます研究が促進されていくであろうことが予感され、実り多きシンポジウムとなった。

研究発表は11、ショートセッションが4発表、またポスターセッションは6つあった。研究の口頭発表ということは、いま研究しているそれぞれのテーマを披瀝するというもののほかに、聞いてもらうことによって生じるリスパンスから内容が豊かに広がる可能性という大きな効果がある。『古事記』から多和田葉子に至る長い日本文学の歴史のなかから抽出された発表が各々の専門の中でだけ語られるのではなく、それらを総体の日本文学として認知していくような研究の互換的な場所として本集會が機能していけばと願ってやまない。

高橋寛子氏の「B・H・チェンバレンによる『古事記』英訳」はチェンバレンの歌謡翻訳において枕詞の解釈を通して、枕詞の概念をどのように解釈していったかを分析した。また同様に黄昱氏は「『徒然草』における漢籍受容の方法」で『徒然草』における『白氏文集』をどのように受容したかについてを発表し、尤芳舟氏は「『十訓抄』における孔子」で孔子説話の日本の教訓への繰り入れを通じて日本文学における孔子像のイメージについて発表した。以上の研究が他言語、他文化との日本文学の交差を主軸に、文学言説の言語横断的な流布の状況に言及し、日本文学という磁場のなかから発生する多言語、多文化的状況を剥出した。

今回の集會での特徴に外国人研究者による緻密な文献学的研究がある。ある意味で日本人研究者より日本的方法を用いているとも言えるのだが、日本

留学時にしか、このような文献学的研究をする時期はなく、その成果の一端が研究発表にも反映されて有意義であった。ジェフリー・ノット氏の「『源氏物語』が語るもの」は、宗祇の『雨夜談抄』を取り上げ、従来看過されてきた宗祇の源氏解釈に迫ろうとするものであった。アンドレア・チェンドム氏の「黄表紙の批判性の再考」は、従来の黄表紙本に付された批判的側面ばかりではなく文献探求の精査によって肯定的側面をうたった黄表紙の存在に言及したものであり、また片龍雨氏は「鶴屋南北の合巻」で南北の合巻執筆の経緯を考察したものである。いずれも資料の渉獵と詳細な読解、また緻密な書誌作成なくして出来得ない研究である。外国人日本文学研究者の日本滞在時の研究方法を考える上にも貴重な成果としてみることができよう。

また国際研究集会のひとつの特徴として文学そのもの、あるいは文学ジャンルの概念そのものを問い直そうとする発表が含まれていることだ。大野ロベルト氏の「三代集における紀貫之の位置づけについて」、ラモーナ・ツアラヌ氏の「『大やうなる能』と『小さき能』」、トム・リゴ氏の「多和田葉子とヨーロッパ」は、それぞれに三代集という詩形式のカノン、能という身体芸術の様式による細かな序列、文学における複数言語的状況をめぐっての問いに発する問題系を題材として、文学の方法、ジャンル、形式、概念を解き明かしていこうとする研究発表であった。

またシンポジウムと通底する研究テーマとして金有珍氏の「『秋夜長物語』の絵巻と奈良絵本について」はこれまで紹介されてこなかった東京大学文学部蔵本を紹介しながら、ソウル大学所蔵の奈良絵本版と比較して、その表現形式の視覚効果の問題に言及した。これもまたシンポジウムテーマと響き合いながら新しい文学研究の方向を示唆するものとして評価したい。

文学の越境的な性質についてもまた、こうした国際的な研究発表では重要な要素となる。鄧麗霞氏の「『在満作家』牛島春子の女性文学」は日本語が決して日本という範疇のみにとどまる言葉ではなく、かつての植民地政策の中でアジア圏に流布していたことを確認する発表でもあった。19世紀以降の帝国主義

下の世界にあって言語は一国民と一文化をつなぎ止めるのみではなく、溢れ出て支配の言語として流通した歴史を忘れてはならないであろう。そこに文学も無縁でなかったこと、そしてそれがあつた達成を見せたことなど、単純には割り切れない種々の問題を惹起していったことに文学研究はどのように寄与するかも、私たちの仕事として確認しておきたい。

ショートセッションも多様なテーマのもとに意欲的な発表がなされ、またポスターセッションではまさしく視覚的な展示によって研究の一端が簡潔に示された。これらの研究が今後大きな構想をともなつた研究へと発展していくことを十分に予測させる発表であつた。

前回から英語による発表も受け付けることとなつたが、前回同様今回も応募がなかつた。勿論、日本に滞在している、あるいは日本文学研究をするという意味から日本語による発表が訓練としても都合がいいとも言えるのだが、現在のよつなインターネットの環境下においては、英語による発信・受信はもはや必須のこととも思える。日本文学に関する論議を広げていくという側面からも英語によつても発表できることをここでお知らせしておきたい。特に日本語を第一言語とする発表者からの積極的な応募を期待したい。

日本において国際的な日本文学研究の推進に国文学研究資料館が果たしてきた役割は本研究集会の開催をはじめとして大きいと言えるであろう。現在、アメリカアジア研究会（AAS）、ヨーロッパ日本学会議（EASJ）などの大きな学会の大会、またアメリカ日本文学会（AJLS）など各国の日本学、日本文学研究が活発に活動している。アジア圏でも相互が連携し合いながら学会や国際シンポジウムを多く開催されている。また日本文学に関する各国の出版状況のデータベースなどもかつてに比べれば格段と充実してきている。広範な日本文学研究の状況にリンクし、互いにサポートし合いながら本集会がますます有機的にネットワークを形成していくことを期待して来年度を楽しみに待ちたい。

来年度は2015年11月14日、15日の二日間を予定している。またたくさんの参加者が集うことを心から願つて、このささやかな総括の結びとしたい。